

要旨

背景

摂食・嚥下機能障害者に使用される経鼻胃管を留置することにより、経口摂取の喪失に伴い苦痛が経験されることが報告されている。嚥下機能障害により経鼻胃管を留置している入院高齢者を対象とした、経口摂取の喪失に伴う苦痛の具体内容について評価した報告および経鼻胃管留置中の苦痛が経口摂取によって緩和され得るかについて検討した報告は見当たらない。

目的

嚥下機能障害により経鼻胃管を留置する 65 歳以上の入院高齢者を対象とし、経口摂取を行っていない群(以下：非経口摂取群)と許容される範囲で経口摂取を行なっている群(以下：経口摂取群)における経口摂取の喪失に伴う苦痛の程度を比較し、摂食状況と経口摂取の喪失に伴う苦痛の関連性について探索的に検討することを目的とした。

方法

研究デザインは、聞き取りを併用した質問紙調査とした。対象者は、2017 年 7 月～2018 年 1 月に都内の医療機関 3 施設に入院中であり、嚥下機能障害により経鼻胃管を留置後 7 日以上 6 ヶ月以内の 65 歳以上の入院高齢者とした。データ収集は、経口摂取の喪失に伴う苦痛に関する 7 項目(飲むことができない・噛むことができない・味わうことができない・食べたいものが食べられない、飲みたいものが飲めない・誰かと話ながら食事をする機会がない・他者の食事がさらされる・口渇)について各々 10 段階のリッカート尺度を用いて苦痛の程度を聞き取った。分析は、非経口摂取群と経口摂取群における経口摂取の喪失に伴う苦痛の関連性について t 検定またはマンホイットニーの U 検定を用いた。また、経口摂取の喪失に伴う苦痛と年齢、認知機能、抑うつ症状、在院日数、経鼻胃管留置日数の関連性について相関分析を行った。

結果

対象者は 29 名であった。経口摂取の喪失に伴う苦痛の程度は、非経口摂取群で 70 点中平均 41.8 点、経口摂取群で平均 36.3 点であり両群間に差を認めなかった ($p=0.27$)。「食べたいものが食べられない・飲みたいものが飲めない」が非経口摂取群で中央値 9.0 点、経口摂取群で中央値 5.0 点であり、経口摂取群で苦痛の程度が有意に低かった ($p=0.04$)。対象者全例 ($r=-0.46, p=0.01$)、および非経口摂取群 ($r=-0.58, p=0.03$) において経口摂取の喪失に伴う苦痛と経鼻胃管留置日数の間に有意な負の相関関係を認めた。

結論

経鼻胃管留置中の入院高齢者において、経口摂取の喪失に伴う苦痛は非経口摂取群と経口摂取群の間に差を認めず、本研究結果から経口摂取の喪失に伴う苦痛が経口摂取により緩和され得るか結論づけることはできなかった。経口摂取の喪失に伴う苦痛のうち、「食べたいものが食べられない・飲みたいものが飲めない」の苦痛の程度は経口摂取群で低かったことから、経鼻胃管留置中であっても経口摂取をすすめることでこの苦痛が緩和され得ることが示された。経口摂取の喪失に伴う苦痛に対する看護ケアは、経口摂取の獲得に向けて経鼻胃管留置後早期より提供する必要があると考えられた。